



すぎもり・ともかず ●東京都立葛飾総合高等学校キャリアアカウンセラ。進路指導部主任。現任校、前任校の開校開設準備に関わり、キャリア教育およびコミュニケーション教育の学校プログラムの作成を行う。職業レディネス・テスト [第3版] 改訂委員。

東京都立葛飾総合高等学校
 創立 ●2007年4月
 所在地 ●東京都葛飾区南水元4-21-1
 課程 ●全日制課程、単位制
 生徒数 ●各学年 6 学級236名 (3 学年合計18学級720人)
 特色 ●全日制の総合学科の高校で、生徒一人ひとりの興味・関心や進路希望に応じて、普通教科、専門教科等の100を超える多様な選択科目の中から自分で選択し時間割を組み立てて学習することができる。進路に合わせて科目選択しやすく6系列の科目群が設定されている (国際コミュニケーション、スポーツ福祉、生活アート、環境サイエンス、情報メディア、メカトロニクス)。また、3年間を通じて計画的なキャリア教育が実施され、地域との連携による活動も活発。

総合学科高校は、1994年に誕生した新しいタイプの学科の高校で、全国で300校弱ほどある。多くの選択科目があり、自分で時間割を作っていくことができる。生徒は様々な科目の中からどれを選択するかをよく考えて決める必要がある。アドバイス・サポートするためにキャリアカウンセラーという役割の人材が配置されることが多い。

07年に開校した葛飾総合高校で、国語科教諭・進路指導部主任を務めながらキャリアアカウンセラとして日々生徒と向き合う杉森共和さんに聞いた。

地域密着型高校

葛飾区には町工場などの製造業の中小企業が多いんですが、葛飾総合高校は、「かつしか異業種交流会 (地域の企業の経営者が集まる任意団体) と産学教育連携を図っています。現場で活躍している社会人、地元企業の社長さんなどを特別講師として招いたり、生徒が工場に出向いたりする授業を行う地域連携科目を設けています。また、区の産業フェアに参加し、ブースを出

キャリア教育に取り組む

私自身、ここ10年ほど進路指導に携わっています。前任校では主に不登校生徒の進路指導やコミュニケーション科目の立ち上げに関わりました。子どもをなんとかしたい、母親をなんとかしたい、そのために「生き方を支える」「自己発見させる」というの

高校でのキャリアアカウンセラの役割

キャリアアカウンセラとしての私の仕事は、①カウンセリング、②ガイダンス、③コーディネート、の三つに大きく分けることができます。

①では、生徒の相談に乗ること (成績、科目選択、進学、就職など) について、1年生の生徒全員との面談が

が出発点でした。

高校生にとって最も大事なのは「学び」です。今やるべき「学ぶこと」というキャリアは、自分の人生にとってどんな意義があるのかということを理解し、興味・関心に沿って将来どんな職業、生き方があるかを知っていく。学びは将来につながっていくものですが、必ずしも職業に直結するものだけではないキャリア教育を目指しています。



キャリア・コンサルタントに聞く

「なぜ学ぶのか」から始まる
 自己発見と職業探索

—総合学科高校での取り組み

東京都立葛飾総合高等学校 キャリアアカウンセラ **杉森共和さん**



あります。

1年次に全員に「職業レディネス・テスト」[※]を実施し、そのテストを成り立たせているホランド理論について説明します。レディネス・テストはその場で結果がわかるので、みんな「なるほど」と思うようです。その後240名近くの生徒にカウンセリングするわけです。

職業知識がない生徒は、日常の生活で接する社会人は限られていますから、客として接して優しくされた経験のある職業ということで、自然と「保育士」や「看護師」、「美容師」などに興味を示す傾向があります。また、音楽と体育に関わる仕事に関心が高い生徒も結構いますが、「本当にやっていけると思うか」「他の科目ができないからそれを選んでいるわけではないか」を本人に問います。それでもどうしても本人がやりたい、という場合はやればよい。

②では、履修ガイダンス時をはじめ

生徒に対する進路講話や、保護者に対する講話・講演等です。

③については、キャリア教育の全体計画「産業社会と人間」の年間計画、「総合的な学習の時間」の年間計画の作成等を行っています。

総合学科の1年次の必修科目である「産業社会と人間」では、翌年から「選択科目を決めるために、「キャリア」を総合的に学びます。「なぜ学ぶのか」の理解や自己理解、職業理解を深め、自分の価値観を形成していき、職業観・勤労観を確立し、そして将来設計につなげていく。

現場での分担・連携が大切

私は、国語の授業も持っているのですが、カウンセリングとの両立がなかなか難しいことがあります。

授業をやっている生徒の顔を知っているという利点もありますが、授業で会わない生徒との間で疎密が出てくることもありますね。

学校という組織の中では、担任の先生との効果的な連携を図り、キャリアカウンセラーが教育現場で異質な存在ではなく活性剤としての役割を果たしていければよいと思っています。

就職担当者は別に一人いますので、面接指導やハローワークとの連携、就職斡旋などはそちらに任せ、私は採用試験がうまくいかなかった生徒やまだ就職活動していない生徒に声をかけたり、担任とのつなぎ役などを行っています。

また、週に1回、スクールカウンセラーに来てもらっているのですが、場面に応じてそちらに担当していただきます。

キャリア・カウンセリングの必要性

総合学科では、「数多くある選択科目から生徒が自分の履修する科目を選ぶ際のアドバイザー」という具体的な必要性があるので、キャリアカウンセラーが求められる面がありますが、普通学科でもキャリア・カウンセリング、キャリア・コンサルティングの意義は高いと思います。それらの役割は、進路指導の先生や、あるいはやはり担任の先生が担うべきでしょう。高校の教員がキャリア・コンサルティングの勉強しておくのは、知識とスキルを身につけるためにもいいと思います。

進路指導が進学指導一辺倒、大学進学のための偏差値による輪切りばかりのようになってしまつのは、キャリアの方向性を教えていないことになる。今の高校生の1学年がだいたい100数万人いるうち、4年制大学に進学するのは約50万人ですから、その他の生徒へのキャリア指導はどうしてもやっつけなければならぬ。

例えば、受験産業というのは、受験生の複数受験を前提として成り立っている。少子化・大学全入時代に、全員第一志望のみで単願受験すれば、競争はなくなりません。みんながそういう意識を持てば、高校教育がかなり変わると思います。目の前の大学合格のみを目的とするのではなく、より広い意味で自立する力をつけるため、という面がもっと重視されてくる。

総合学科は、それらを目指した新しい教育に取り組んでいるのです。

学校現場は常にビビッド

私自身の今のライフ・ステージで

は、いわゆる中間管理職として、若い人たちの要望を聴いて上層部へ上げたり、上層部の意向を若い人たちに伝えていき、指導的役割を果たしたり、という立場にあり、学校全体、教員、そして生徒それぞれを見ながら対応していかなければならない苦労があります。

でも、思うにキャリア・カウンセリングをやるべきなのは、こつこつたミドルの位置にいる人間なのではないでしょうか。

確かに毎日多忙ですが、やはりこの仕事のやりがいには他に替え難い。生徒というのは日々ビビッドに変わっていきます。悩んで俯いていた生徒が、話しているうちにバツと顔を上げた瞬間、明るい顔になっている。生徒を明るく、元気にさせることができる現場であるわけですから。

われわれのサポートが力になっていくということは、生徒は内心で感じてくれているのではないかと思います。あるいは、自分で進路を決めたと思っただけでも、私たちが一人ひとりをサポートしている結果であったりするわけですから。

そういう意味では、もっと生徒が私を頼りにしなくなるようになればいいんです。カウンセラーの存在は陰になり、学校全体で、よりシステムティックに機能していればよい。

そして、一部の生徒に照準を合わせるのはなく、どんな生徒に対しても一人ひとりの自立を支えていけるような、全体を見据えたキャリア教育が全国で進められたら、という希望を持っています。地道に実践していくしかないのですけれども。

※職業レディネス・テスト：職業興味、基礎的志向性、職務遂行の自信度を測定することにより、進路選択・職業生活への準備状態（職業レディネス）を把握する検査。全国の中学、高校、職業相談機関等で広く活用されている。興味と自信度を測定する枠組みにアメリカの心理学者ホランドによる職業興味の6領域が使われている。